

## 原 寛\*: ツェンペリーが命名した日本植物の基準選定について

Hiroshi HARA\*: Typification of the Japanese  
plants named by Thunberg

「国際植物命名規約」は、植物の学名を国際的に安定させる目的で制定されたものである。

日本植物の学名を安定させるためには、まずツェンペリー(1743年生)の命名した学名の適用をはっきりさせることが重要である。彼はリンネの弟子であるが、オランダ商館の主任医官として1775年8月13日長崎に入港、翌日出島に上陸、1776年3月4日に出発して江戸を往復し、6月25日出島に戻り、同年12月3日長崎をたって帰国の途についた。当時多くの制限の下で、彼は日本植物の観察採集に努力し、約1ヶ月の江戸滞在の間には日本の本草学者とも会って智識を交換した。帰国後これらの資料を基にして1780年以後多くの論文を発表し、*Flora Japonica* (1784) をまとめた。

ツェンペリーはまず日本植物をできるだけリンネが2名法によって命名した学名に同定しようとした。しかし新種と考定命名したものには彼が採集した標本に基づいて新しく記載をつけた。

**和名** ツェンペリーは日本植物を同定する一助として和名に興味をもち、日本滞在中できるだけこれを集めその意味も理解しようと努めた。当時日本植物についての唯一のまとまった文献である *Kaempfer, Amoenitatum Exoticarum Fasc. V* (1712) を精読し、その中で和名(又は漢字名)の題下に記されている植物をできるだけ同定しようと試みた。彼の論文では、学名、記相文 (diagnosis)、シノニム、和名、記載の順序に書かれている。*Flora Japonica* の序文 p. xxvii から分かるように、植物名(学名)と日本名(和名)を区別して、和名は学名のシノニムの次に、かならずいちいち '*Japonice*' と明示して別項目として記している。彼自身が集めた和名はそのまま引用し、ケンフェルによって採用した場合はケンフェルのページまで明記し、和名(漢字名)のスペルもそのまま引用した。しかしツェンペリーも1年あまりで日本語を習得するのは難しく、日本人側もオランダ語や植物の智識が十分でなく、意志の疎通に苦しんだことが推察される。したがって漢字の音・訓読み、スペルの方式の不統一など細かい点は勿論、全く誤った和名が引かれている場合もあるのは当時としては止むをえないと思われる。現在の智識から見れば、ほとんどがどこかで間違っているといえるほどで、和名を重視

\* 東京大学 総合研究資料館植物部門. Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo.

することはできず、ツェンペリーの学名を解釈する際には和名は命名上のシノニムから除外して別に扱うのが妥当で、これがツェンペリーの意志にそった扱いと思われる。

**基準選定** 古い学名の基準選定を行うのは大変厄介で難かしい問題である。欧米では今でもリンネの学名の適用で意見が一致しないもののがかなりあり、最近ようやく大英博物館が中心になり特別委員会を作って世界中の多くの学者の意見をききながらリンネの全学名のタイプをきめる作業を始めたところである。命名規約の解釈・適用は、一般の法律と似た点があり、規約の条文を読むだけではなく、これまでの多数の判例を十分に調べた上でこれに準じて判定することが大切である。当時は今のように整理された命名規約は無く、特にタイプに関する厳格な申し合わせはなかったので基準選定は尚更難かしい。ツェンペリーの学名についてはすでに中井、小泉両先生を初め多くの意見が出されているが、広く一般的な見解がのべられたことはない。私は日本植物の学名の安定のためこの点に留意し、滞英中にリンネやツェンペリーの学名に精通している W. T. Stearn 博士と度々意見を交した。最近モクレン属の学名を検討した植田邦彦君とも話し合い、広い見地からツェンペリーの命名した学名についてのまとめを書いたらとの話がでたこともあって、本文を用意し、次に幾つかの実例をあげて解説してみることにした。

**例 1.** 比較的簡単と思われる トウガンの例から始める。ツェンペリーは ‘Kaempferus Illustratus’ と題する論文で、Kaempfer が *Amoenitatum Exoticarum* (1712) に記した日本の植物についての解説を発表した。その第 2 部 p. 33 (1783) の最上段に ‘Ko, vulgo Jungauo, p. 811. *Cucurbita hispida*.’

とある。ケンフェルは上記 p. 811 の漢音名と和名の後に、‘*Cucurbita fructu oblongo, flore magno albo.*’ という記相文をつけていて、日本の学者ならこれがユウガオであることがすぐ分る。それ故これだけを見れば、ツェンペリーはケンフェルが上記の名の下で記相文をつけた植物、即ちユウガオに対し *Cucurbita hispida* という新学名を正当に発表したと解釈できる。中井博士はこのような解釈の下に *Cucurbita hispida* Thunb. をユウガオと同定して、植研 18: 24 (1942) で学名を整理され、私も一時この見解に従った(植雑 61: 5, 1948)。

しかしながらツェンペリーはこの論文で新種(属)とした学名に対しては論文の終りに別に記相文をつけている。同論文 p. 38 には次行のようにつけ加えた。

‘*Cucurbita hispida*: foliis angulatis, caule petiolisque hispidis.’

この記相文はケンフェルの文章と異なり、明らかにツェンペリー自身が書き加えたものである。Flora Japonica では和名の引用は同じであるが更に長文の記載をつけている。一方ツェンペリー標本室には彼が ‘*Cucurbita hispida* α.’ と手書した日本産の標本 (No. 22775) がある。これは花をつけた枝で、トウガンと同定できる。またこれはツェンペリーの記相文とも一致し、*Cucurbita hispida* の holotype とも見られる。ただトウガンの花は黄色であり、ツェンペリーがなぜケンフェルが白花とはっきり記している

ユウガオという和名と同じと見たか分からない。またケンフェルの著書にはユウガオのすぐ下方に別に 'Tokwa 冬瓜' がのっており、ツェンペリーはこれを *C. Pepo* L. にあてているのが我々から見れば不思議である。ツェンペリー当時にはこの程度の和名の誤りは止むをえず、和名を重視すべきでないと納得する外はない。

最後に *Cucurbita hispida* Thunb. のタイプについての上記二つの見解のどちらをとるべきかが問題になる。現在は後者、即ちツェンペリー自身の記載に一致し、ツェンペリーの手書のある標本 (no. 22775) をタイプと見なし、この学名を *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. としてトウガンに用いるのが一般に広く行われている。もしそうでないと有用植物として広く知られている学名を変えなくてはならなくなる。和名については、ツェンペリーがケンフェルの和名の同定を誤ったに過ぎないと理解される。

***Benincasa hispida*** (Thunb.) Cogniaux in DC., Monogr. Phan. 3: 513 (1881) - Cogniaux et Harms in Engl., Pfl.-reich IV-275, II, Ht. 88: 164 (1924).

*Cucurbita hispida* Thunb. in Nova Act. Reg. Soc. Sci. Upsal. 4: 33 & 38 (1783), excl. Kaempf., Ko, etc.; Fl. Jap. 322 (1784), excl. Kaempf., Ko, etc.

*Lagenaria ? hispida* (Thunb.) Seringe in DC., Prodr. 3: 299 (1828).

Lectotype: Japonia (Thunberg, Herb. No. 22775, UPS).

例 2. 次は *Cleyera japonica* の場合である。ツェンペリーは Nova Gen. Pl. 3: 68-69 (1783) で新属新種 *Cleyera japonica* を発表し、詳しい記載をつけ長崎附近の産とし、いつものような形式で和名

'Japonice: Mokokf vel Mukokf. Kaempf. Am. ex. Fasc. V, p. 873, fig. pag. 874.'

を引用しこの場合にはケンフェルの図まで引用している。その図は当時としては大変よく描かれているので、それが和名の通りモッコクであることは明らかである。Fl. Jap. 12 & 224 (1784) でもほぼ同様に記されている。その後ツェンペリーは Trans. Linn. Soc. 2: 335 (1794) で、*Cleyera japonica* をシノニムに引用して *Ternstroemia japonica* を発表したか、これは明らかに新組合せと解釈される。

一方ツェンペリーの標本室には彼の *Cleyera* 記載の基になった標本 (No. 12428) が *Ternstroemia japonica* と手書されている。厄介なことにはこの標本は、サカキの1花枝とモッコクの果実をつけた2小枝からなり、*Cleyera japonica* は花はサカキ、果実はモッコクによって記載された混合物であることが分かる。ここで指摘しておきたいことは、ケンフェルの書 p. 777 に *Sakaki* が載っているが、ツェンペリーは Fl. Jap. p. 354, no. 27 でこれを不明の植物にいれており、Kaempf., Ic. Select. Pl. t. 33 (1791) の '*Sakaki*' の図もどこにも引用していない。

ツェンペリーの *Cleyera japonica* がサカキとモッコクの混合であることを最初にはっきり指摘したのが Sieb. et Zucc. (1841) であり、サカキを *Cleyera japonica*

Thunb., モッコクを *Ternstroemia japonica* Thunb. として区別を明らかにした。しかし *japonica* は同一原出典に基づく種名でこれを両方に使うことは現行規約では許されず, *Cleyera japonica* はサカキに保留され, モッコクは *Ternstroemia gymnanthera* (Wight et Arn.) Beddome が正名とされている。

この場合にはツェンペリーの記載とその基になった標本が重要と考えられ, その混合の一方に名を残した最初の Sieb. et Zucc. の lectotypification を認めて名の適用を定めた。この際和名の引用は全く無視されたことになる。

**Cleyera** Thunb. [nom. conserv.], Nov. Gen. 3: 68 (1783), excl. Kaempfer, Mokokf.

**Cleyera japonica** Thunb., Nov. Gen. 3: 69 (1783), emend. Sieb. et Zucc., Fl. Jap. 153, t. 81 (1841)—Sprague in Journ. Bot. 41: 17 & 83 (1923).

Lectotype: Japonia (Thunberg, sub *Ternstroemia japonica*, Herb. No. 12428, UPS; quoad ramis floriferis, excl. ramis fructiferis).

例 3. ギボウシ類についてである。ツェンペリーは ‘Kaempferus Illustratus’ の第 1 部 p. 204 (1780) でケンフェルの Amoen. Exot. の ‘Joksan, vulgo Gibboosi p. 863.’ に対し, 初めて *Aletris japonica* の新種名をあたえた。そうして p. 208 で新しく次の記相文をつけ加えた。

‘acaulis, foliis petiolatis, ovato-lanceolatis, septem-nerviis; floribus spicatis.’

ケンフェルの記した植物はその漢字名と記相文の中で花が 3 インチとあることなどからタマノカンザシを指すと思われる。しかしツェンペリーはこの場合も第 1 例と同じくケンフェルからではなく自分の見た植物を基にして新たに記相文を書いたのである。したがってこの場合も彼が日本で採集した標本 (No. 8630) を基にして記載命名したと考察され, これはコバノギボウシの一形である (原: 植研 59: 175, 1984 参照)。

Flora Japonica p. 142 (1784) で *Hemerocallis japonica* の名がつけられ, 日本での産地や長い記載がつけられたが, 早い *Aletris japonica* Thunb. の名は引用されていない。しかしその記相文は同じであり, 和名もケンフェルのを引用していること, 更に標本には *Hemerocallis japonica* とあり *Aletris* と記していないことなどから, この名は新名ではなく新組合せと考えられ, そのタイプは *Aletris japonica* と同じ標本とみなされる。これは Bailey, Stearn, Hylander などの一致した見解でもある。当時は *Hemerocallis* 属にカンゾウ, ギボウシ, ウバユリ までいれられていたことから, ツェンペリーがギボウシ類の分類に迷ったことが推察できる。

更にツェンペリーは 1794 年 (Trans. Linn. Soc. 2: 335), 彼が扱ったギボウシ類が 1 種でないことに気付いて, これを 2 種に分けて発表した。ところが彼は, *Hemerocallis japonica*, Fl. Jap. 142 に対し *H. lancifolia* の新名を提唱し, 他方に *H. japonica* の名を使って新しい記載をつけ, *H. japonica*, Kaempfer, Icon. Select. Pl.

tab. 11 (1791) をシノニムとして (和名の出典としてではなく) 引用している。この処置は現行命名規約に反するので、残念ながら両名とも不適法の学名として扱うより致し方ない。学名のタイプの扱い方が現在のように厳格になったのは近年のことであるので止むをえない。

**Hosta Sieboldii** (Paxton) J. Ingram f. **lancifolia** (Miquel) Hara in Journ. Jap. Bot. **59**: 179 (1984).

*Aletris japonica* Thunb. in Nov. Acta Reg. Soc. Sci. Upsal. **3**: 204 & 208 (1780), excl. Kaempf., Joksan.

*Hemerocallis japonica* Thunb., Fl. Jap. 142 (1784), excl. Kaempf., Iaksan etc.; non *H. japonica* Thunb. 1794.

*Hemerocallis lancifolia* Thunb. in Trans. Linn. Soc. **2**: 335 (1794), nom. superfl.

Lectotype: Japonia (Thunberg, Herb. no. 8630, ut *Hemerocallis japonica*, UPS).

命名上の問題はこれで終る訳だが、ギボウシ類の分類の難しさをのぞかせる余談を記しておこう。ツェンペリー 標本室には上記のコパノギボウシの一形とみられる標本 (No. 8630) の他に3枚のギボウシ類の標本があり、その3枚には '*Hemerocallis undulata*' というツェンペリーの手書がある。この学名は正式には発表されなかったが、これら3枚の標本は、ツェンペリーが1794年に *H. japonica* と呼んだものではないかと推察される。3枚の中の2枚の標本 (Nos. 8631 & 8632) にはばらばらの葉と花序がはられていて葉は広卵形であり、トウギボウシの一形と思われる。引用されている Kaempf. Icon. Select. Pl. t. 11 (1791) の図もこれに近い形であり、前川博士はこれをトクダマと見ておられる。他の1枚 (No. 8633) は広い中斑がはいった葉をつけ、葉縁が波状になっていてスジギボウシと思う。ツェンペリーの foliis... undulatis という記載はこの標本によったもので、彼が手書した学名 *H. undulata* の基になったのであろう。古い園芸品をふくむギボウシ類の分類は難かしく、古くあたえられた種名の考定にはまだ多くの疑問が残されている。

例4. *Acer pictum* でこれはなかなか複雑である。まずツェンペリーは '*Kaempferus Illustratus*' 第2部 p. 36 (1783) で2種のモミジに新名をあたえた。ケンフェルの Amoen. Exot. (1712) の '*Keequan Mokf, vulgo Kaide, item Momidsi. p. 892*' に対し *Acer palmatum*, '*Eadem foliis & c. p. 892.*' を *Acer pictum* と名付け、共に新種であるので p. 40 で次の記相文をつけ加えている。

'*Acer palmatum*: foliis inciso-palmatis, serratis, glabris, floribus um bellatis.'

'*Acer pictum*: foliis 7-lobis, glabris, lobis, acuminatis, aequaliter acuteque serratis.'

この場合もケンフェルの記事の内容とは別に、記相文はツェンベリーが新しく書き加えている。

Flora Jap. p. 162 (1784) (原著ではこのページが p. 161 と誤植になっている) で、*Acer palmatum* については前と同じ記相文と和名を引用し記載を追加しており、標本室にはツェンベリーがそう手書している 2 枚の標本 (Nos. 24080 & 24081) があり、園芸品的な形がふくまれているが種としてはイロハモミジで問題がないのでこれ以上ふれないで置く。

一方 *Acer pictum* の方は 1784 年に 2 種に分けられ、*Acer septemlobum* と *A. pictum* となっている。しかも *A. septemlobum* の記相文は 1783 年の *A. pictum* のものと全く同じであり、和名は省かれて記載がつけ加えられている。*A. pictum* の記相文では葉裂片が 'integris' と重要な性質が変更されており、Momisi の和名が入れられ、記載でも葉裂片が全辺な点が強調されており、また葉に白斑紋があることが記されている。ツェンベリーの *Dissertatio Botanica de Acere* (1793) でも同様な扱いがされている。標本室には共に 1 枚ずつの標本があり、No. 24085 には *Acer septemlobum* の手書があり、3 葉をつけたもので記載と一致する。No. 24084 は *Acer pictum* と手書があり、葉に白斑があって裂片は全辺である。Thunberg, *Icon. Pl. Jap.* 5: t. 3 (1805) にも *Acer pictum* としてこの図がのっている。

しかし問題なのは *Acer pictum* の内容が、ギボウシの場合と同様に、途中で変ってしまったことである。これは原著者による変更でも原記載と明らかに矛盾するものに用いることは許されないので、初めの *Acer pictum* Thunb. (1783) は全く同一記相文のつけられた *A. septemlobum* と同一とみなされ、標本 (No. 24085) は両学名の lectotype として扱われることになる。この標本は小泉先生の指摘通りハリギリであり、現在 *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai がその正名として用いられている。標本 No. 24084 によって代表される 1784 年以後の *Acer pictum* の学名は不適法で使用できないが、それは中井先生が書かれているように葉下面に細毛があり、オニイタヤの斑入りの園芸品種フイリオニイタヤをさしており、その学名は *Acer mono* Maxim. var. *ambiguum* (Pax) Rehder f. *albomarginatum* (Dipp.) Rehder である。

***Kalopanax pictus*** (Thunb.) Nakai, *Fl. Sylv. Korea.* 16: 34, t. 8-10 (1927), ut *pictum*.

*Acer pictum* Thunb., *Nov. Acta Reg. Soc. Sci. Upsal.* 4: 36 & 40 (1783), nihil aliud; non *Acer pictum* Thunb. (1784).

*Acer septemlobum* Thunb., *Fl. Jap.* 162 (1784); *Diss. Bot. Acer.* 6 (1793).

Lectotype: Japonia. (Thunberg, *Herb.* No. 24085, ut *Acer septemlobum* Thunb. UPS).

例 5. 終りに *Magnolia* の場合を検討してみよう。

ツェンペリーは初め日本の *Magnolia* をすべて北米産の *M. glauca* L. にふくめ、最初 Kaempferus Illustratus II, 34 (1783) では Kaempf., Amoen. Exot. 845 の ‘Sini & Confusi, vulgo Kobus, aliis Side Kobusi’ を ‘*M. glauca*  $\alpha$ ’, ‘Mokkwuren’ を ‘*M. glauca*  $\beta$ ’ とした。1年後の Fl. Jap. 236 (1784) ではほぼ同様な扱いをしているが、注目すべき点がいくつかある。まず *M. glauca* につけられている記相文はリンネの北米産の記相文をそのまま写したもので、ツェンペリーが日本産について記したものではない。*M. glauca*  $\alpha$  を ‘flore albo’  $\beta$  を ‘flore magno, atropurpureo’ と記したが、勿論命名ではなく、‘Folia adulta valde grandia evadunt, obovato-oblonga; subtus glauca, reticulata et villosa.’ という記載文が加えられていて、 $\beta$  につけ加えられた和名 ‘Fo no Ki’ と共に彼が後で記した *M. obovata* の記載とよく一致する。 $\alpha$  には和名 ‘Mitsmata’ が加えられている。

一方ツェンペリー標本室には彼が日本で採集した次の4枚の標本が実在する。

- A (No. 12884) 2花のみ *Magnolia hirsuta* Th. (シモクレン)
- B (No. 12885) 大形の葉 *Magnolia obovata* Th. (ホオノキ)
- C (No. 12886) 花後の枝(葉なし) *Magnolia sericea* Th. (ミツマタ)
- D (No. 12887) 2花をつけた枝 *Magnolia tomentosa* Th. (シデコブシ)

ツェンペリーはこれらの標本を再検討した結果、Trans. Linn. Soc. 2: 236 (1794) (図1) にこれまで *Magnolia glauca* としていたものを2新種にわけて発表した。

一つは *Magnolia obovata* であり、その記載は前述の *M. glauca* の末尾につけられたものとかかなり一致する。シノニムに *M. glauca* Fl. Jap. p. 236 が引用されているが  $\alpha$ ,  $\beta$  の区別はなく単に pro parte の意味と思われる。ただ引用されている和名が似ていることから  $\beta$  にあたるとも見える。植田君は、ツェンペリーは *Magnolia* において特に花色を重視して分類したとしているが、この点は納得できない。植田君は上記  $\alpha$ ,  $\beta$  を正式の発表としているが、変種名はなく問題にならない。ケンフェルは  $\beta$  の和名としたモクレン中に白花と紫大花とをふくめているので初めから一貫性はない。

他の *Magnolia tomentosa* については新らしく記載がつけられていて、シノニムは新種と全く同じに引用されている。和名は Mitsmata を最後にあげ Kobus. Kaempf. Icon. Select. tab. 42 が新たに加えられた。これらから Fl. Jap. の *M. glauca*  $\alpha$  とはその内容を大分変えたようにとれる。

本篇に引用した諸例からも分かるように、ツェンペリーの新名の基準選定には彼の記載を重視するのが妥当である。彼の場合他から引用した記載と自身の書いた記載とは注意すれば判別できることが多く、彼の書いた記載によく一致する標本が彼の標本室にあった場合には、その標本がタイプと見なされる。また彼は Fl. Jap. の序文に記されているようにシノニム、植物名(学名)と和名とをはっきり区別して引用している。

*Magnolia obovata* Thunb. の場合には、記載は彼自身がつけたものであることは間違いない、それが標本 (No. 12885) に基づいたものであるのも明らかであるので、その標本を lectotype として解釈すべきである。この標本がホオノキであることは一致した意見であり、ホオノキの正名と認められる。Dandy (1973) は 'Kaempf. Icon. Select. tab. 43 & 44' が記されていることを重視しているが、Fig. 1 で分かるようにツェンペリーは注意深くシノニムである *Magnolia glauca* の次に項を改めて 'Japonice' (和名) として引用している。しかも和名の項のモクレンとホオノキの間にはさんで引用しているので、ケンフェルの 2 文献によればモクレンという和名はシモクレンとハクモクレンの総称であることを示したので、その 2 図を内容をふくめた命名上のシノニムの引用とみるのは曲解も甚だしい。同 336 ページの *Magnolia* のすぐ上の *Begonia* (シュウカイドウ) の項には、'Kaempf. Icon. Select. tab. 20' がシノニムとして引用されており、この場合は 'Japonice' (和名) としてではない。もしツェンペリーが内容をふくめて引用したとすると、1) なぜ t. 43 (ハクモクレン) と t. 44 (シモクレン) の 2 種を混合して両方を引用したのか、2) ケンフェルのモクレンの記事をみれば花色の異なるものがあることが記されているのにツェンペリーは紫大花を開くものだけを  $\beta$  モクレンとしたのはなぜか、3) 更にツェンペリーは t. 44 にあたるシモクレンの花の標本 (No. 12884) があるのになぜ花の記載をかかなかったのか、そうして 4) *Magnolia obovata* Th. の名を手書きせずにシモクレンに *M. hirsuta* という名を書いたのはなぜかなど色々矛盾点がでてくる。植田君によれば、ツェンペリーは花色を重視したが、ケンフェルの記載を花色をふくめて引用したと解釈されるので、原記載には花色が省かれているとしているが、そのようなやり方は例がなく、ありえない。*Magnolia obovata* の種名は大きな倒卵形の葉をつけたホオノキの標本 (No. 12885) を基にして命名記載されたことは明白である。

次の *Magnolia tomentosa* の方がもっと複雑である。この場合もツェンペリーの記載は自ら書いたものであることは確かで、花後の花枝の特徴が記されている。この記載に一致する標本 (No. 12886) は実は *Magnolia* ではなく、ミツマタの花冠のしぼんだ時期の標本である。ツェンペリーが Fl. Jap. p. 237 の *Magnolia glauca*  $\alpha$ . の和名に 'Mitsmata' を加え、一方 p. 365 にも不明な植物としてこの名を引き、更に *M. tomentosa* の和名の第一にこれをあげていることとの関連が興味深い。中井先生はこれに気づき、1919年ミツマタに対し *Edgeworthia tomentosa* (Thunb.) Nakai の新組合せを発表された。No. 12886 の標本には Dandy が 1936 年にこれを検討して *Magnolia tomentosa* のタイプである旨ラベルに書いてはっている。これらのことから素直に解釈すれば、*Magnolia tomentosa* はその原記載とそれに符合する標本 No. 12886 があるので、それをレクトタイプとしてミツマタに用いるということになる。

しかし二三の疑問が残る。ツェンペリーは 1784 年までは *Magnolia glauca*  $\alpha$  の和名



**BEGONIA grandis:** foliis inæqualiter ferratis glabris, caule angulato.

*Begonia obliqua.* Flor. Japon. p. 231. Kämpf. Icon. Select. tab. 20.

*Begonia grandis.* Dryander Act. Soc. Linn. Lond. vol. 1, p. 163.

**MAGNOLIA obovata:** foliis obovatis subtus parallelo-nervosis reticulatis.

*Magnolia glauca.* Flor. Japon. p. 236.

*Japonice:* Mokkwuren. Kämpf. Am. Exot. fasc. v. p. 845. Icon. Select. tab. 43 et 44. it. Fo no ki.

*Folia* obovato-oblonga, integra, glabra; subtus parallelo-nervosa et tenuissime-reticulata nervis villosis, palmaria usque pedalia.

**MAGNOLIA tomentosa:** foliis ellipticis subtus tomentosis.

*Magnolia glauca.* Flor. Japon. p. 236.

*Japonice:* Mitsmata; item Kobus. Kämpf. Icon. Sel. tab. 42.

*Folia* elliptico lanceolata, acuta, petiolata, integra, supra glabra, subtus sericeo-tomentosa, palmaria.

*Pedunculi* breves, reflexi, fulcati, crassi, tomentosi.

## CLEMATIS

図 1. Trans. Linn. Soc. London 2: 336 (1794) の下部.

に Kaempf. Amoen. Exot. にでているコブシまたはシデコブシを引用していたが, *M. tomentosa* ではこれをやめてしまい, 和名にはミツマタとコブシ Kaempf. Icon. Sel. tab. 42 が引用されていて, この図は間違いなくコブシである。また前記のようにもう 1 枚の標本 No. 12887 があり, これはシデコブシの花枝であってこれには *Magnolia tomentosa* の名が書かれている。同様に Thunb. Icon. Pl. Jap. 5: t. 8 (1805) にもシデコブシの花の図がのせられている。しかしながら *M. tomentosa* の原記載に花については全く書かれておらず, 原記載にかかっている花枝の性質はこの標本では何も分からない。1936 年 Dandy はこの標本に *M. tomentosa* のタイプとはみなし難いとのラベルをはっている。一番問題なのは, なぜツェンペリーが原記載に合致する標本 No. 12886 に *Magnolia tomentosa* の名を書かず, *M. sericea* と書いたかという点である。ここで前にあげたギボウシとカエデの例が思い浮べられる。それはツェンペリーが 1 種を後に 2 種に分割する時に, 早い名の方に必ずしもタイプを残さずに, 新しい種名の方に早い名のタイプをふくめていることである。即ち *Magnolia tomentosa* には初め

ミツマタとシデコブシをふくめていたが、これを二分した際にシデコブシの標本の方に *M. tomentosa* の名を書き残したのだと思われる。しかし前述の例と同じく現在はこのようなことは許されず、*Magnolia tomentosa* はその原記載によく一致する標本 No. 12886 を lectotype とするのが正しい（規約 9.2）。植田君はツェンペリーはモクレン属の種を記載しようとしたのだからミツマタにこの名前は使用できず、このように解釈することがプロトログに合致するという趣旨をのべているが、これは現行規約では論外で納得できない。分類学上の見解が正しいかどうかは、命名上の問題とは全く無関係である。殊に古い時代に属や科を間違えて記載した例は珍らしくなく、ツェンペリーの場合でもイタヤカエデとハリギリ、サカキとモッコク、アジサイと *Viburnum* を混同していた時代である。命名上の扱いにはその分類上の問題とは全く関係なく、ましてミツマタの場合はツェンペリー自身最後までそれを *Magnolia* の一種と思っていたので何も問題はない。プロトログというのは命名規約第 8 条で lectotype を選ぶ場合の参考に定めたもので、正当に出版された学名と関連のあるすべての事項を考慮すべきことをのべている。しかしその中で最も重視されるのは原記載であることが第 8, 9 条の中にふくまれている。標本が原記載と一致しない場合でも、他に原記載によく合致する標本があった場合はその方を lectotype にすることが示されている。

*Magnolia tomentosa* Thunb. の学名がこれまで用いられなかったのには、もう一つの理由があったことも推測される。この名がミツマタとシデコブシの混合であることは中井、小泉両先生がウブサラでその標本を見られた時から気付かれていた。この場合のようにその学名が全く異なる植物の混合に基づいたものであった場合には、その学名は discordant element の混合という理由で廃棄できることが命名規約第 70 条に規定されていたが、この条文は近年 1975 年になって削除されてしまった。したがって中井先生 (1928) が *Cleyera* をこの規定にしたがって捨て、サカキ属に *Sakakia* の新名をあたえられたのは当時は適法であった。1936年に標本を検した Dandy も *Magnolia tomentosa* をとりあげて論議しなかったのもこのためと思われる。しかし現行の命名規約ではこれは許されず、命名規約第 9.2 条によって原記載によりよく符合する標本を lectotype に選定してその学名を採用しなければならない。

Superfluous name の解釈もあまり広義にひろげると、反って学名の混乱を招く場合があり好ましくない。*Magnolia obovata* における Dandy のような解釈を認めると、*Cleyera* という属名が不用名となりどちらにも用いられなくなる。前述のように *Cleyera japonica* には和名 (Japonice) としてケンフェルが図まで引用されているが、実はこの図をタイプとしてすでに *Mokof* Adanson, Fam. Pl. 2: 501 (1763) が発表されている。したがってこのケンフェルの引用をその内容をふくむシノニムの引用と認めれば *Cleyera* は *Mokof* に対する不用名 (superfluous name) になる。

しかしこれまでは和名とはっきり記して引用してあるケンフェルは和名の出典を示し

たものと解され、ツェンペリーが和名を誤って引用したに過ぎないとみられている。私もこの解釈が正しいと理解しており、ツェンペリーの引用している和名は、学名の命名上の解釈には直接関係がないと考えている。

**Magnolia obovata** Thunb. in Trans. Linn. Soc. 2: 336 (1794), excl. Japon. Mokkwuren Kaempf.—Hara in Taxon 26: 587 (1977).

Type: Japonia (Thunb., Herb. No. 12885, UPS).

**Edgeworthia tomentosa** (Thunb.) Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 206 (1919).

*Magnolia tomentosa* in Trans. Linn. Soc. 2: 336 (1794).

*Magnolia sericea* Thunb., Mus. Nat. Acad. Upsal. 16: 137 (1794), nom. nud.

Lectotype: Japonia (Thunberg, Herb. no. 12886, ut *Magnolia sericea* Thunb., UPS).

なおオオヤマレンゲの学名 *Magnolia Sieboldii* K. Koch は、Ueda (1980) が近年気付いたように記しているが (Ueda in Taxon 35: 341, 1986), 45年も前から原 (Journ. Jap. Bot. 16: 255, 1940) が指摘採用している。

今から見るとツェンペリーの学名の基準選定には厄介な問題が多い。しかし当時多くの制限下で短期間にあれだけ日本植物をまとめ研究の基礎を築いた功績は高く評価されるべきだと思う。リンネとケンフェル以外の著書がない時代に自分の採集した少数の標本とメモ、日本でえた少数の和書とメモだけを便りに仕事をするのが如何に困難だったか想像できる。あの時代としてはツェンペリーの標本は非常によく整理されている。彼の論文では学名、記相文、シノニム、和名、産地、記載と一貫した方式で厳格に区別して書かれている。他書から引用した字句と彼自身が書いた記載とは少し注意すれば区別できる。彼が種を記載した当時の状況と心境を十分に理解した上で、一方では現行命名規約の枠内で一貫した方針に従って lectotype を選定するのが慣習で妥当な解決法であると思う。厄介な仕事であるが日本植物の学名の国際的安定を計るため努力すべきであると思う。

〔後記〕 原 寛先生は昭和61年9月24日突然に亡くなられた。この論文は9月6日の本誌編集会に先生が原稿を持参され、私に読んでおくようにとのお話であった。原稿を拝見すると、先生は病をおして数回にわたって手をいれ、内容を推敲し改訂しておられる。このため、一部に読み難いところがあり、印刷に際し私が判読した部分もある。先生は『欧米にある東亜植物基準標本』を、中井、小泉両先生に次いで、詳細に検討され、さらに、欧米の学者達と意見を交わして、国際的にも広く通用する解釈を採り、日本植物の学名を正しく定めるべく努力された。最後の御論文は偶然にもツェンペリーの学名の問題に戻られた。先生の御研究に深く敬意を表したい。(大橋広好)